

23. 農学部

I	農学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	23- 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	23- 4
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	23- 4
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	23-13
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	23-22

I 農学部の教育目的と特徴

神戸大学農学部の前身は、昭和24年に篠山に設置された兵庫県立農科大学である。その後、学科・講座の全面的な改組を経て、昭和41年に神戸大学農学部となり、翌昭和42年には、農学部学舎の六甲台への移転が完了した。昭和47年に修士課程を擁する大学院農学研究科が設置され、昭和56年には、農学部、工学部、理学部を母体とする大学院自然科学研究科（後期3年の博士課程）が設置された。平成15年には、附属農場を改め附属食資源教育研究センターを設置した。平成19年には、独立研究科である自然科学研究科から一般研究科の農学研究科（博士課程前期課程・後期課程）に改組し、翌平成20年には、学部を改組してBMD（学部・修士・博士課程）一貫の3学科6コース／3専攻6講座体制とし、現在に至っている。

（教育目的）

1. 本学部は、農学を核とする広範な知識を授けるとともに、食料・環境・健康生命に代表される農学の諸課題を探究することによって、持続共生社会を構築するための知識と技術を備えた人材を育成し、知的基盤を創成することを教育研究上の目的としている。
2. 現行の中期目標においては、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成するため、国際的に魅力ある教育を展開する。」との目標を掲げている。農学部では、これに基づいて学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）を策定し、「人間性」「創造性」「国際性」及び「専門性」を備えた人材の育成を教育目的としている。

（組織構成）

農学は、食料・環境・健康生命に代表される農学の諸課題にさまざまな方法論でアプローチする総合科学である。本学部は、専門性を備えた人材を育成するため、3学科6コースの組織構成をとっている《資料1》。食料環境システム学科は「工学」と「経済学・社会学」を軸に、資源生命科学科は解析対象に係る「動物学」と「植物学」を軸に、また生命機能科学科は「化学」と「生物学」を軸に組織されている。これらを、附属食資源教育研究センター、地域連携センター、食の安全・安心科学センターが学科横断的にサポートする体制を構築している。

《資料1：組織構成》

学科	コース名	教育研究分野				
食料環境システム学科	生産環境工学コース	水環境学	土地環境学	施設環境学	地域共生計画学	
		農産食品プロセス工学	生体計測工学	生物生産機械工学	生物生産情報工学	
	食料環境経済学コース	食料経済学	食料生産管理学	食料情報学		
資源生命科学科	応用動物学コース	動物遺伝育種学	動物多様性利用科学	生殖生物学	発生工学	栄養代謝学
		分子形態学	組織生理学	感染症制御学	動物遺伝資源開発学	細胞情報学
	応用植物学コース	資源植物生産学	植物育種学	森林資源学	園芸植物繁殖学	
		園芸生産開発学	園芸生理生化学	熱帯有用植物学	植物遺伝資源開発学	
生命機能科学科	応用生命化学コース	生物化学	食品・栄養化学	天然有機分子化学	有機機能分子化学	環境分子物理化学
		植物機能化学	動物資源利用化学	微生物機能化学	微生物資源化学	生物機能開発化学
	環境生物学コース	土壌学	植物栄養学	植物遺伝学	栽培植物進化学	細胞機能構造学
		環境物質科学	細胞機能制御学	植物病理学	昆虫分子機能科学	昆虫多様性生態学
附属食資源教育研究センター						
地域連携センター						
食の安全・安心科学センター						

（教育上の特徴）

神戸大学農学部は、京阪神という大消費地の中にある一方、山（六甲山系）と海（瀬戸内海）を隔てて、丹波・但馬・播磨・淡路という大農業生産地に隣接しており、国際貿易港神戸港（海外の農業生産地と国内の生産地／消費地との接点）とも指呼の間にある。神戸港には、食の安全を守るために神戸植物防疫所・神戸検疫所が設置されている。まさに国際性と

地域性の包括・統合を目指す GLOCAL (Global+Local) な教育を行うために最適の条件が備わっている。

神戸大学農学部では、「農場から食卓まで」の「農場」側を重点的に担当する附属食資源教育研究センター、農場から食卓に至る過程と「食卓」側を重点的に担当する食の安全・安心科学センター、ならびに地域貢献・教育を担う地域連携センターを設置し、立地条件を生かした教育に取り組んでいる《資料1》。さらに、フィリピン大学ロスバニョス校と提携し、学生派遣、講師招聘等を行うなど国際教育にも積極的に取り組んでいる。

(想定する関係者とその期待)

本学部の教育に関する関係者としては、在学生及びその家族、卒業生及びその雇用者、ならびに地方自治体と地域の農業関係者を想定している。これらの関係者からは、「幅広く深い教養、農学分野における専門的知識・技術・論理的思考能力、ならびに国際的教養を兼ね備えた人材の育成」を期待されている。行政及び農業関係者からは、地域活性化への期待も大きい。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

教育目的に即した組織編成については《資料1》参照。農学部教員の配置状況は、《資料2》のとおりである。各学科・コースのカリキュラム・ポリシーに基づいて主要な授業科目は必修に指定され、専任の教授・准教授が担当している。選択科目も主に専任の教授・准教授が担当しているが、実験・実習・演習等は、助教も担当している。専任教員1人あたりの学生収容定員は6.5名で、適切な規模である。附属食資源教育研究センターには13名の技術職員を配置している。また、演習・実験科目等にはティーチングアシスタント(TA)を適宜配置している《資料3》。

《資料2：教員の配置状況(平成27年5月1日現在)》

学科	兼務教員数									非常勤	
	教授		准教授		助教		計			男	女
	男	女	男	女	男	女	男	女	計		
食料環境システム学科	9	1	8	0	2	0	19	1	20	2	0
資源生命科学科	11	1	10	1	5	1	26	3	29	3	0
生命機能科学科	17	0	11	0	5	3	33	3	36	0	0
食資源教育研究センター	1	0	2	0	2	2	5	2	7	0	0
地域連携センター	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0
合計	38	2	31	1	14	7	83	10	93	5	0

《資料3：TA採用実績(平成27年度)》

学科	講義科目	演習・実験科目	(単位:人)
			計
食料環境システム学科	18	20	38
資源生命科学科	11	56	67
生命機能科学科	2	98	100
合計	31	174	205

入学者の選抜については、農学部として求める学生像(アドミッション・ポリシー)を定め《資料4》、これに基づき一般選抜試験に加え、推薦入試、第3年次編入学入試、私費外国人留学生特別入試等多様な選抜を実施している《資料5》。

《資料4：農学部アドミッション・ポリシー》

農学部では、「農場から食卓まで(From Farm to Table)」の「食料・環境・健康生命」をキーワードとし、これらに関わる諸課題の解決を通じて人類の生存と福祉に貢献する「持続共生の科学」を理念としています。これに基づき、自然科学や社会科学を含む総合科学である農学を基礎とした幅広く深い教養に加えて国際感覚と豊かな人間性を備え、食料の安定供給、環境保全と新規バイオ産業の創生、および食の安全安心に向けた研究や技術開発を通じて地域および国際社会に貢献できる人材の養成を目標として、次のような学生を求めています。

○農学部の求める学生像

1. 日本語や英語の基礎的な理解力、表現力などのコミュニケーション能力を身につけている学生
2. 自然科学および社会科学の基礎を十分に理解できる学生

3. 人間と自然のかかわり合いに強い関心を持ち、未知の現象の解明や独創的な技術開発に意欲的に取り組める学生
 4. 地域および国際的な社会活動に高い意欲を有する学生

以上のような学生を選抜するために、農学部では、大学入試センター試験により総合的な基礎学力を測り、個別学力検査では「数学」「理科」「外国語」（後期日程にあつては、「数学」「外国語」）を課すことにより、自然科学分野における幅広い教養と深い知識とともに、理解力、読解力、語学力等を測ります。

《資料5：入学者選抜方法と入学定員》

学科	入学定員	一般選抜		推薦入試	(単位:人)	
		前期	後期		私費外国人留学生	編入学
		食料環境システム学科	35			
資源生命科学科	53	43	10	0		
生命機能科学科	62	50	12	0		
合計	150	116	29	5	若干名	10

学生の収容定員と現員の状況は、《資料6》に示すとおりである。全体として、定員充足率は1.1倍前後の適切な範囲にある。

《資料6：学生の収容定員と現員の状況》

学科	年度	収容定員	(単位:人,%)	
			現員	定員充足率
食料環境システム学科・ 生産環境工学コース	平成22年度	78	85	1.09
	平成23年度	104	112	1.08
	平成24年度		115	1.11
	平成25年度		113	1.09
	平成26年度		116	1.12
	平成27年度		114	1.10
食料環境システム学科・ 食料環境経済学コース	平成22年度	27	33	1.22
	平成23年度	36	45	1.25
	平成24年度		43	1.19
	平成25年度		45	1.25
	平成26年度		46	1.28
	平成27年度		48	1.33
資源生命科学科・ 応用動物学コース	平成22年度	78	85	1.09
	平成23年度	104	116	1.12
	平成24年度		114	1.10
	平成25年度		116	1.12
	平成26年度		110	1.06
	平成27年度		111	1.07
資源生命科学科・ 応用植物学コース	平成22年度	81	92	1.14
	平成23年度	108	125	1.16
	平成24年度		126	1.17
	平成25年度		121	1.12
	平成26年度		121	1.12
	平成27年度		121	1.12
生命機能科学科・ 応用生命化学コース	平成22年度	96	104	1.08
	平成23年度	128	142	1.11
	平成24年度		142	1.11
	平成25年度		145	1.13
	平成26年度		147	1.15
	平成27年度		146	1.14
生命機能科学科・ 環境生物学コース	平成22年度	90	96	1.07
	平成23年度	120	130	1.08
	平成24年度		132	1.10
	平成25年度		133	1.11
	平成26年度		130	1.08
	平成27年度		126	1.05

学部教育の検討・改善は学部教務委員会が、学生生活に関わる諸課題の検討は学生委員会
が、入学・卒業の判定は教授会が行うが、さらに自己点検・評価委員会を設置し、《資料7》
に示す手順で、教員の研究・教育・大学運営・社会貢献活動の評価を行っている。教育の評
価においては、授業担当コマ数、指導学生数等を基礎に、さまざまな要件を加味した基準を
定め、厳密な評価を実施している。

また、教職員の意識向上のため、ファカルティ・ディベロップメント(FD)研修会を行って
いるほか、講義技術をお互いに学び向上させるため、全員参加の講義ピアレビューを行って
いる《資料8》。ピアレビューにおいては、各教員が必ず3年に1回自分の講義のレビュー
を受けるとともに、毎年レビューアールとして他教員の講義を参観し、コメントを付した報告
書を提出する。この報告書の内容は当該講義担当教員に還元され、講義の改善に役立ってい
る。また、ピアレビューはレビューアールにとっても講義技術を学ぶよい機会になっている。
アクティブラーニングを積極的に取り入れている講義を参観し、学生に積極的に発言させ
るための様々な工夫・技術を学び、それを自らの講義に導入しようとの動きも徐々に広が
っている。さらに、学生による授業評価アンケートを実施し、学生からのコメントを講義改善
に役立っている。

《資料 7：教員活動評価の手順》

- 4～5月：自己点検・評価委員会は、教員活動評価の方法を決定する。
- 5～6月：農学研究科事務部が、農学研究科所属教員に関する教務情報（教育）、総務係保有情報（管理運営）、KUID入力情報（研究）を「農学研究科 教員活動評価書（個人用）」に記入し、各教員に送付する。
- 6月：各教員は「農学研究科 教員活動評価書（個人用）」の内容を点検・修正するとともに「社会貢献」を記入し、事務部に返送する。
- 6～7月：農学研究科自己点検・評価委員会は、「農学研究科 教員活動評価書（個人用）」の内容を評価し、「教員活動評価結果通知・報告書」に評価結果の原案を記入する。評価結果の内容を農学研究科企画調整室が点検する。
- 8月：研究科長は、「教員活動評価結果通知・報告書」を各教員に送付する。教員は意見があれば、申し立てる。
- 9月：研究科長が意見に対して説明する。また、最終評価結果をとりまとめ、結果の概要を学長に報告する。
- 10月：自己点検・評価委員会は、教員活動評価の方法を点検し、問題点を取りまとめ、次回の教員活動評価法を改善する。

《資料 8：授業ピアレビュー実施要領 抜粋》

授業ピアレビュー実施要領 （平成 23 年 4 月 15 日制定）

授業ピアレビューを、以下の要領で実施する。

1. ピアレビュー授業実施教員の決定
ピアレビューの対象となる授業を行う教員を、ピアレビュー授業実施教員と称する。
毎年、各コースの授業を担当する全教員の 1/3 に当たる教員がピアレビュー授業を実施し、3年間で授業を担当する全教員がピアレビューを受ける。
授業実施教員は、コースごとに選出する。
2. ピアレビューア어의決定
授業をピアレビューし、授業ピアレビューレポートを作成する教員をピアレビューア어と称する。ピアレビューア어は、教員全員が担当するものとする。一つのピアレビュー授業について3名以上のピアレビューア어가参加する。
各授業のピアレビューア어의選出は、教務委員会において年度当初に無作為に選択するものとする。
3. 実施時期
各年度の前期及び後期に、それぞれ授業ピアレビュー期間（前期：6、7月；後期 11、12月）を設け、その期間内に授業ピアレビューを行う。
ピアレビュー授業実施教員は、授業ピアレビュー実施期間内で適当な授業科目（実習及び演習は除く）と期日を当事者間で決定し、教務学生係に連絡する。但し、出張等によりピアレビューに支障が生じる場合は、当事者間で調整する。
4. 授業ピアレビューレポート
ピアレビューア어は、授業後にピアレビューレポートを作成し、教務学生係に提出する。教務学生係はレポートを保管し、教務委員会において、ピアレビューの効果やフィードバック等について報告を取りまとめる。
なお、ピアレビュー授業実施教員には、担当した授業科目のピアレビューレポートを開示する。

附属食資源教育研究センター、地域連携センター、食の安全・安心科学センターによる学科横断的教育サポート体制は極めて有効に機能している。食資源教育研究センターは、その施設・設備・組織の整備に努めてきた結果、平成 26 年度に近畿地方初の教育関係共同利用拠点（農場）に認定され、他大学の学生に対しても広く農業と食の重要性を学ぶ機会を提供している。地域連携センターは、篠山市と連携して教育を進め、篠山市からの支援を受けて特命助教 1 名が配置されているほか、平成 27 年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択され、特命講師 1 名が配置されている。また、食の安全・安心科学セン

ターは、独立行政法人農林水産消費安全技術センター（神戸センター）との連携教育を実施している。

（水準）

期待される水準を上回る。

（判断理由）

演習・実験科目等にはティーチングアシスタントを適宜配置している。自己点検・評価委員会を中心に教員の自己点検・評価を綿密に行うとともに、FD 研修・ピアレビュー・学生アンケートを利用して不断に教育の質の改善に取り組んでいる。また、附属食資源教育研究センター、地域連携センター、食の安全・安心科学センターは、学科横断的な実践的教育や外部との連携教育を新たに実施している。

以上のことから、本学部の教育の実施体制は、期待される水準を上回ると判断する。

観点 教育内容・方法

（観点到係る状況）

平成 19 年度に農学部のアドミッション・ポリシー《資料 4》、平成 23 年度にディプロマ・ポリシー《資料 9》、平成 24 年度にカリキュラム・ポリシー《資料 10》を策定し、学科・コースごとに教育課程を見直すとともに、体系的な教育課程を構築した。教育課程は「全学共通授業科目」及び「専門科目」で構成される。「全学共通授業科目」では、幅広い教養と知識の修得を目的として、教養原論、外国語科目、情報科目、健康・スポーツ科学に関わる多様な科目を開講している。また、専門科目への円滑な移行を図るため、共通専門基礎科目を開講している。

「専門科目」については、1 年次で農学に関する包括的な知識と広い視野を身に付けた後、基礎的な専門科目から高度な専門科目へと徐々にステップアップできるよう、それぞれの学科・コースの教育目的に沿って体系的な教育課程を編成した。環境生物学コースの例を《資料 11》に示す。

《資料9：農学部ディプロマ・ポリシー》

神戸大学農学部は、農学を核とする広範な知識を授けるとともに、食料・環境・健康生命に代表される農学の諸課題を探究することによって、持続共生社会を構築するための知識と技術を備えた人材を育成し、知的基盤を創成することを教育研究上の目的としている。

この目標達成に向け、農学部では、学士課程において授与する学位に関して、国際的に卓越した教育を保証するため、以下に示した方針に従って学位を授与する。

- ・農学部規則に定める卒業に必要な単位を修得する。
- ・卒業までに、学士課程を通じて、本学部学生が達成を目指す学習目標は次のとおりである。

「人間性」

豊かな教養と倫理観を身につけ、専門家として行動できる。

「創造性」

農学にかかわる伝統的な思考や方法を批判的に継承し、さらに新しい発想や手法を修得することによって、様々な課題を創造的に解決できるための基礎能力を身につける。

「国際性」

多様な価値観を尊重し、優れたコミュニケーション能力を発揮できる。

「専門性」

食料・環境・健康生命に代表される農学の諸課題を探究することによって、持続共生社会を構築するための知識及び技術を修得し、農学にかかわる職業や学問分野において指導的役割を担えるよう、学識と専門的能力の基礎を備える。各学科における具体的な学習目標は次のとおりである。

<食料環境システム学科>

農業生産の基盤と食料の生産・加工・流通・消費により形成される食料環境システムにかかわる知識を修得し、食料生産・加工技術、地域環境、食料需給などの様々な問題に取り組める専門的能力の基礎を身につける。

<資源生命科学科>

農業にかかわる生物資源及びその相互作用にかかわる基礎から応用までの知識を修得し、生物資源の探索・生産・利用から保全・管理技術の開発に至る様々な問題に取り組める専門的能力の基礎を身につける。

<生命機能科学科>

生命が生み出す多岐にわたる機能を作物、食品、化学・医薬品等の生産に活用するためのバイオサイエンスにかかわる知識を修得し、農と食における多様な機能及び現象を分子から生態系レベルまで広範囲に解析できる専門的能力の基礎を身につける。

《資料10：農学部カリキュラム・ポリシー前文》

農学部は、農学に関する広範な知識を授け、「農場から食卓まで」の「食料・環境・健康生命」に関わる諸課題を探究することで、持続共生社会を構築するための知識と技術を備えた人材を育成し、社会の知的基盤を創成することを目指している。この教育研究の目標を踏まえて、本学部は、生産環境工学、食料環境経済学、応用動物学、応用植物学、応用生命化学、環境生物学の6コースを配置し、各コースのカリキュラムマップに従って教育を実施する。

《資料 11：教育課程体系図－環境生物学コースの例》

1年生前期	Basic Science (Fundamental)									
	統計学基礎	化学基礎	生物学基礎	農学基礎						
		◎有機化学 I 2 ○基礎無機化学 2	○生物学 I 2	◎基礎遺伝学 I 2	○農と植物医科学入門 2 ○分子生命農学入門 2	◎食の倫理 2				
後期	○数理統計学 2	◎有機化学 II 2 ◎基礎物理化学 2	○生物学 III 2 ◎細胞生物学 2	◎基礎遺伝学 II 2 ◎分子生物学 2	○生命機能科学序説 2	◎緑の保全 2				
	Basic Science (Advanced)		Applied Science (環境科学)			Applied Science (植物医科学)				
		土壌環境	生物環境	物質環境	植物育種・遺伝資源開発	非感染症・非生物ストレス応答	感染症・生物ストレス応答			
2年生前期	◎蛋白質・酵素化学 2	◎基礎土壌学 2	◎基礎昆虫害 2					○微生物概論 2		
後期	○分子遺伝学 2	○土壌生化学 2	○昆蟲の構造と機能 2 ○森林環境学入門 2	◎環境物質科学 2 ○環境遺伝子工学 2	○植物育種学 2	○植物栄養学 2	◎基礎植物病理学 2			
3年生前期	◎ハイトイソシス基礎実習 2 ○細胞遺伝学 2 ○※集団遺伝学 (4回可/隔年集中) ○進化生態学 2 ○一般分析化学 2 ○生物物理化学 2	○土壌と環境 2 ○※土壌動物学 2 (4回可/隔年集中)	○昆蟲の生態と管理 2	○生物分子計測科学 2 ○※ナノバイオロジー 2 (4回可/隔年集中)	○作物遺伝学 2 ○※植物遺伝資源学 2 (4回可/隔年集中)	○植物環境応答学 2	○防疫微生物学 2			
後期	○ハイトイソシス研究法 2 ○ゲノム解析学 2 ○組織分析化学 2		○※昆蟲遺伝生化学 2 (4回可/隔年集中)	○※生物反応工学 2 (4回可/隔年集中) ○バイオ直産物 2 (集中)		○植物機能化学 2				
4年生前期			○森林生態学 2					○森林保護学 2 ○作物・樹木病害診断演習 2		
後期	環境・生態系分野を究める					植物医科学系分野を究める				
<small>◎は必修科目、○印は選択科目、数字は単位数を示す。 ※印は、非常勤講師担当の科目を示す。 科目名 共通専門基礎科目 科目名 学際共通科目 科目名 応用生命化学コース開講科目 科目名 学部共通科目 科目名 コース開講科目 科目名 応用植物学コース開講科目</small>										

この中で、1年次に配置されている「食の倫理」と「緑の保全」は、農学に関する包括的な知識と広い視野を身に付けさせるために導入した全農学部生の必修科目である。これらの講義において、「食料・環境・健康生命」に関する諸問題を、自然科学・社会科学のさまざまな観点から教授し、農学に対する意識付けを行う。これらの科目は農学部を特徴づける代表的科目として、他学部からの受講者も多い。

また、農学部では、学生の多様なニーズや社会・地域からの要請に対応し、《資料 12》のような講義を開講しているほか、国際性の涵養を目的として、外部英語試験の導入を図っている。

《資料 12：学生の多様なニーズや社会・地域からの要請に対応した取組》

<p>(1) 実践的教育と卒業研究</p> <p>知識を実体験によって効果的に体得できるよう、2～3年次にコースごとに「学生実験」や「演習」が行われ、研究手法や解析法を学ぶ。4年次には必修科目となっている「卒業研究」を全学生が履修し、教育研究分野《資料 1》ごとに指導教員・副指導教員の指導の下に1年間をかけて研究を実施して卒業論文をまとめ、4年間の学修の総決算を行う。また、総合的技術体系である農業の特質を学ぶよう、附属食資源教育研究センターを利用した「農場実習」「牧場実習」にも力を入れている。本センターは前項で述べたように平成 26 年度に教育関係共同利用拠点（農場）に認定され、他大学の学生に対しても農業と食の重要性を学ぶ機会を提供している。</p>
--

また、地域や社会に貢献できる実践的な人材の育成を目的として、食農コープ教育プログラムを設置し、「実践農学入門」「兵庫県農業環境論」「実践農学」を開講している。「実践農学入門」と「実践農学」では、篠山市と提携し、農家で実際の農業を体験させており、「兵庫県農業環境論」では、JA や兵庫県農林水産業関係者を講師として招聘し、兵庫県農林業の実態と施策について教授するとともに、ワークショップを実施して具体的な事業施策の立案過程を体験させている。



食農コープ教育プログラムを通じて、これまでに農業農村に関連した地域の課題解決に取り組みしてきました。以下の写真はその一例です。

食農コープ教育 プログラム FLASH

本プログラムでは、生産者・生活者の問題を発見し、学部教育で培ってきた専門性と結びつけ、解決に取り組むことができる人材の育成を目指し、現場を教材とした実習や講義を実施します。なお、本プログラムは、神戸大学 ESD サブコースの単位に対応しています（詳細は裏面と別紙参照）。

食農コープインターンシップ

一定期間、食と農の現場（食と農に関係する企業や行政機関、農家や農村のグループ）で研修を通して働くこととなり、地域での課題にチャレンジし、経験や専門知識を深めるとともに、自身のキャリアを考える機会を確保します。

実践農学

持続可能な農業農村の発展に資する事業施策の計画・実践・評価を現場に即ち行うことにより、農業農村に関する地域の活性化策としての策・調整力も身に付けることを目指す。「兵庫県農業環境論」における最終事業施策を現場に即ち実践可能な事業を立案し、その実践活動を事後評価することを通じて、最終的に事業施策を構築する。

食と農を支える実践力を養おう!

現場での実践経験を卒業研究や就職活動に活かそう!

食農コープ教育

現場での経験を活かし、専門知識を深めよう!

学習した専門知識を活かし、現場で実践してみよう!

Cooperative Education on Food and Agriculture
地域と共に育む実践力
http://kobe-face.jp

FACE
神戸大学 農学部
食農コープ教育プログラム

(2) 国際教育

平成 17～24 年度には、「熱帯農学海外演習」と「アジア農業環境海外演習」を開講し、東南アジア（フィリピン・ベトナム）における農業の実情を見学・体験させた。平成 25 年度からは、これらを統合し、「UPLB 実用英語演習」を開始した《資料 13》。このプログラムは日本学生支援機構（JASSO）の支援を受けて、学生がフィリピン大学ロスバニョス校（UPLB）に 3 週間滞在し、実用英語の集中トレーニングを受けるとともに、UPLB の学生との交流を行う。これにより、「使える英語」を体得するとともに、多様な価値観を受け入れ、尊重しつつ、積極的に自己を表現することのできる「人間的総合力」を涵養する。



(3) 教職課程
中学校教諭一種・理科、高等学校教諭一種・理科、及び高等学校教諭一種・農業の教員免許を取得できるカリキュラムを設けている《別添資料1：学生便覧 p133》。
(4) 資格取得関連科目
「食品衛生管理者、食品衛生監視員」《別添資料2：学生便覧 p. 144-147》、「測量士補」《別添資料3：学生便覧 p. 148》の資格取得に関わるカリキュラムを設定するとともに、平成23年度より「実験動物技術者」、平成24年度より「樹木医補」の資格取得に関わる授業科目を設定し《別添資料4：学生便覧 p. 150》、また、関連施設として平成25年度には神戸大学学内共同の実験動物飼育施設（ライフサイエンス・ラボラトリー）を設置した。
(5) インターンシップ
インターンシップに対応した科目として、食の安全・安心科学センターが独立行政法人農林水産消費安全技術センター（神戸センター）と共同で開講する「食の安全科学技術演習」、生産環境工学コースが開講する「地域環境工学現地実習」「生物生産工学現地実習」において、講義内容の実践的理解と、実際の現場で必要とされる能力の体験的修得を図っている。
(6) JABEE 認定地域環境工学プログラム
生産環境工学コースにおいて、地域環境工学プログラムが JABEE 認定プログラムとして運用されており、技術者教育の質の確保と充実に対する社会の要請に対応している。
(7) 英語外部試験の導入
国際性の涵養を目的に、平成24年度より1年次と4年次に TOEFL ITP 試験を無償で受験できるシステムを導入した。また、平成24年度より3年次編入学試験、大学院博士課程前期課程の入学試験に TOEFL ITP 試験を導入した。

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、講義目的、各回の授業内容、成績評価基準、準備学習、参考書、履修条件等について具体的な指示を行っている。その他、1年間に学生が履修科目として登録できる単位数の上限を54単位とするキャップ制を採用し、学生が各年次にわたって適切に授業科目を履修するよう促している《別添資料5：学生便覧 p. 75-76》。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

農学部のアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーを策定し、求める人材像・育成する人材像を明確にするとともに、学科・コースごとに教育課程を見直した。これらに沿って、農学全般に対する幅広い視野・多角的視野を養った後に、より高度な専門知識を身に付けられるよう体系的な教育課程を編成しており、効果的に教育が実施されている。実践的教育においては「農場実習」「牧場実習」「学生実験」「演習」のほか篠山市や兵庫県と協力したプログラムを、国際教育においてはUPLBと協力して質の高いプログラムを提供しており、高い教育効果を挙げている。また、「実験動物技術者」と「樹木医補」の資格取得に関わる授業科目や施設を新たに整備したほか、国際性の涵養を目的として、英語外部試験の導入を図った。さらに、教育関係共同利用拠点として認定された附属食資源教育研究センターは、他大学学生に対して質の高い実践的教育の提供を開始した。

以上のことから、本学部の教育内容・方法は期待される水準を上回ると判断する。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

進級者状況を《資料 13》に示す。進級者とは3年次修了時点で指定科目の単位修得と修学期間が規定に達している学生である。最終学年への進級率は各学科・年度で異なるが、年度ごとの平均値及び過去5年間の全平均値は88%である。

《資料 13：4年生への進級率》

《資料 14：学部生の卒業率》

4年生への進級率		(単位:人, 人, %)		
年度	学科・コース名	在籍者	進級者	進級率
平成22年度	応用動物学	34	30	88%
	植物資源学	48	38	79%
	生物環境制御学	44	41	93%
	生物機能化学	44	38	86%
	食料生産環境工学	39	35	90%
	計	209	182	87%
平成23年度	応用動物学	3	2	67%
	植物資源学	8	2	25%
	生物環境制御学	3	0	0%
	生物機能化学	6	1	17%
	食料生産環境工学	2	0	0%
	生産環境工学	31	29	94%
	食料環境経済学	12	9	75%
	応用動物学	29	29	100%
	応用植物学	33	32	97%
	応用生命化学	41	40	98%
環境生物学	31	30	97%	
	計	199	174	87%
平成24年度	応用動物学	1	0	0%
	植物資源学	1	1	100%
	生物環境制御学	2	1	50%
	生物機能化学	1	0	0%
	食料生産環境工学	1	1	100%
	生産環境工学	32	27	84%
	食料環境経済学	13	11	85%
	応用動物学	29	26	90%
	応用植物学	35	33	94%
	応用生命化学	35	32	91%
環境生物学	33	33	100%	
	計	183	165	90%
平成25年度	生物環境制御学	1	0	0%
	生物機能化学	1	0	0%
	生産環境工学	28	25	89%
	食料環境経済学	14	11	79%
	応用動物学	31	29	94%
	応用植物学	33	31	94%
	応用生命化学	38	35	92%
環境生物学	36	33	92%	
	計	182	164	90%
平成26年度	生産環境工学	34	28	82%
	食料環境経済学	14	8	57%
	応用動物学	30	30	100%
	応用植物学	32	30	94%
	応用生命化学	42	38	90%
環境生物学	40	35	88%	
	計	192	169	88%
	全合計	965	854	88%

学部生卒業率		(単位:人, 人, %)		
年度	学科・コース名	卒業可能者数	卒業者	卒業率
平成22年度	応用動物学	31	31	100%
	植物資源学	48	40	83%
	生物環境制御学	43	41	95%
	生物機能化学	39	37	95%
	食料生産環境工学	37	36	97%
	計	198	185	93%
平成23年度	応用動物学	2	2	100%
	植物資源学	7	6	86%
	生物環境制御学	3	1	33%
	生物機能化学	6	5	83%
	食料生産環境工学	1	1	100%
	生産環境工学	28	26	93%
	食料環境経済学	11	11	100%
	応用動物学	28	28	100%
	応用植物学	32	31	97%
	応用生命化学	40	38	95%
環境生物学	30	30	100%	
	計	188	179	95%
平成24年度	植物資源学	1	1	100%
	生物環境制御学	1	1	100%
	生物機能化学	1	0	0%
	食料生産環境工学	1	1	100%
	生産環境工学	29	29	100%
	食料環境経済学	11	10	91%
	応用動物学	26	26	100%
	応用植物学	33	32	97%
	応用生命化学	34	32	94%
	環境生物学	32	31	97%
	計	169	163	96%
平成25年度	生物機能化学	1	1	100%
	生産環境工学	24	23	96%
	食料環境経済学	12	11	92%
	応用動物学	30	30	100%
	応用植物学	32	30	94%
	応用生命化学	36	34	94%
	環境生物学	35	32	91%
	計	170	161	95%
平成26年度	生産環境工学	29	28	97%
	食料環境経済学	9	9	100%
	応用動物学	29	29	100%
	応用植物学	32	30	94%
	応用生命化学	40	39	98%
	環境生物学	37	37	100%
	計	176	172	98%
	全合計	901	860	95%

卒業率《資料 14》は各学科・年度で異なるが、年度ごとの卒業率を平均した値は、過去5年間で95%であった。3年次から4年次へと進学した卒業可能者中、卒業できなかった残り5%の学生は、家庭の事情や経済的理由あるいは病気等の理由により途中休学した者が多いが、多くは休学事由の解消後に復学・卒業している。

Web 授業アンケートを全授業（少人数制のゼミ授業や演習科目を除く）に対して実施し、学生の意見を聴取している《資料 15》。平成 26 年度後期授業評価アンケート集計結果を《資料 16》に示す。アンケートの結果から、「担当教員の授業への熱意が感じられましたか」との設問には 87%が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。また、「この授業を受けて関連分野又は専門分野への興味・関心が増しましたか」との設問に関しては、77%の学生が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えており、今後の学習への積極的な取組を示唆する結果となった。なお、総合的に判断して授業が有益だったと考えている者は 86%であった。

《資料 15：Web 授業アンケートの内容》

<p>1: 担当教員の授業への熱意が感じられましたか。【選択式 5者択1】</p> <p>I. <input type="radio"/> そう思う II. <input type="radio"/> どちらかといえばそう思う III. <input type="radio"/> どちらともいえない IV. <input type="radio"/> どちらかといえばそう思わない V. <input type="radio"/> そう思わない</p> <p>2: この授業に関して、平均して毎週どれくらい自己学習(予習、復習を含む)をしましたか。【選択式 5者択1】</p> <p>I. <input type="radio"/> 180分以上 II. <input type="radio"/> 120分以上-180分未満 III. <input type="radio"/> 60分以上-120分未満 IV. <input type="radio"/> 30分以上-60分未満 V. <input type="radio"/> 0-30分未満</p> <p>3: シラバスは、授業の到達目標、内容、成績の評価方法・基準を明確に示していましたか。【選択式 5者択1】</p> <p>I. <input type="radio"/> そう思う II. <input type="radio"/> どちらかといえばそう思う III. <input type="radio"/> どちらともいえない IV. <input type="radio"/> どちらかといえばそう思わない V. <input type="radio"/> そう思わない</p> <p>4: 授業の内容はよく理解できましたか。【選択式 5者択1】</p> <p>I. <input type="radio"/> そう思う II. <input type="radio"/> どちらかといえばそう思う III. <input type="radio"/> どちらともいえない IV. <input type="radio"/> どちらかといえばそう思わない V. <input type="radio"/> そう思わない</p> <p>5: この授業を受けて関連分野又は専門分野への興味・関心が増しましたか。【選択式 5者択1】</p> <p>I. <input type="radio"/> そう思う II. <input type="radio"/> どちらかといえばそう思う III. <input type="radio"/> どちらともいえない IV. <input type="radio"/> どちらかといえばそう思わない V. <input type="radio"/> そう思わない</p> <p>6: 次の項目で改善が必要と思われる事項をチェックしてください(複数可)。【選択式 6者択6】</p> <p>I. <input type="checkbox"/> 担当教員の学生に対する接し方 II. <input type="checkbox"/> 担当教員の話し方 III. <input type="checkbox"/> 板書・OHP、教材、指導書・ビデオ等 IV. <input type="checkbox"/> 授業の進み方 V. <input type="checkbox"/> 授業の計画性 VI. <input type="checkbox"/> 特になし</p> <p>7: 総合的に判断して、この授業を5段階で評価してください。【選択式 5者択1】</p> <p>I. <input type="radio"/> 有益であった II. <input type="radio"/> どちらかといえば有益であった III. <input type="radio"/> どちらともいえない IV. <input type="radio"/> どちらかといえば有益ではなかった V. <input type="radio"/> 有益ではなかった</p>
--

《資料 16：平成 26 年度授業アンケート結果》

(単位：%)

設問項目		回答Ⅰ	回答Ⅱ	回答Ⅲ	回答Ⅳ	回答Ⅴ	回答Ⅵ
1	担当教員の授業への熱意が感じられましたか。	54	33	9	3	1	0
2	この授業に関して、平均して毎週どれくらい自己学習(予習、復習を含む)をしましたか。	5	4	13	27	51	0
3	シラバスは、授業の到達目標、内容、成績の評価方法・基準を明確に示していましたか。	38	37	18	4	3	0
4	授業の内容はよく理解できましたか。	27	48	15	6	4	0
5	この授業を受けて関連分野又は専門分野への興味・関心が増しましたか。	41	36	14	5	4	0
6	次の項目で改善が必要と思われる事項をチェックしてください(複数可)。	5	10	17	12	9	47
7	総合的に判断して、この授業を5段階で評価してください。	53	33	9	3	2	0

平成 26 年度卒業生に対し、卒業時にアンケートを行い、次の内容の回答を得た《資料 17》。
「幅広い教養」を得たかの質問に対し、87%が「大いに身についた」「どちらかといえば身についた」と回答している。また、「深い専門知識・技能」については、80%が「大いに身についた」「どちらかといえば身についた」と答えている。その主な理由としては、40%が農学部で専門教育の講義・演習・実験を受けたことと答えており、農学部での教育が在学生に対して専門知識の涵養に重要な役目を担っていることが明らかとなった。さらに、「総合的なものの見方」については、94%の学生が「大いに身についた」「どちらかといえば身についた」と答えており、その要因として 29%が「各学部で専門教育の講義・演習・実験を受けたこと」と答えている。

《資料 17：卒業時アンケート》（一部抜粋）

設問番号	回答	%
1:「幅広い教養」について、あなたは、4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか？ また、どのような場面で修得にもっとも役に立ったと思いますか？	【程度】大いに身についた	20
	【程度】どちらかといえば身についた	67
	【程度】どちらともいえない	13
	【程度】どちらかといえば身につかなかった	0
	【程度】全く身につかなかった	0
	《場面》全学共通教育の講義・演習・実験を受けたこと	42
	《場面》各学部で専門教育の講義・演習・実験を受けたこと	17
	《場面》卒業研究を行ったこと	25
	《場面》ゼミ・研究室に所属し指導教員から直接指導を受けたこと	0
	《場面》先輩から教育・研究の指導を受けたこと	0
	《場面》プロジェクト研究、共同研究を行ったこと	0
	《場面》学生同士の勉強会・研究会に参加したこと	0
	《場面》学会や学外の研究会等に参加したこと	0
	《場面》課外活動(クラブ・サークル等)に参加したこと	17
	《場面》社会活動(ボランティア等)に参加したこと	0
《場面》その他	25	
2:「深い専門知識・技能」について、あなたは、4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか？ また、どのような場面で修得にもっとも役に立ったと思いますか？	【程度】大いに身についた	20
	【程度】どちらかといえば身についた	60
	【程度】どちらともいえない	13
	【程度】どちらかといえば身につかなかった	7
	【程度】全く身につかなかった	0
	《場面》全学共通教育の講義・演習・実験を受けたこと	0
	《場面》各学部で専門教育の講義・演習・実験を受けたこと	40
	《場面》卒業研究を行ったこと	27
	《場面》ゼミ・研究室に所属し指導教員から直接指導を受けたこと	27
	《場面》先輩から教育・研究の指導を受けたこと	0
	《場面》プロジェクト研究、共同研究を行ったこと	0
	《場面》学生同士の勉強会・研究会に参加したこと	0
	《場面》学会や学外の研究会等に参加したこと	0
	《場面》課外活動(クラブ・サークル等)に参加したこと	0
	《場面》社会活動(ボランティア等)に参加したこと	0
《場面》その他	7	
5:「総合的なものの見方」について、あなたは、4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか？ また、どのような場面で修得にもっとも役に立ったと思いますか？	【程度】大いに身についた	27
	【程度】どちらかといえば身についた	67
	【程度】どちらともいえない	0
	【程度】どちらかといえば身につかなかった	7
	【程度】全く身につかなかった	0
	《場面》全学共通教育の講義・演習・実験を受けたこと	0
	《場面》各学部で専門教育の講義・演習・実験を受けたこと	29
	《場面》卒業研究を行ったこと	7
	《場面》ゼミ・研究室に所属し指導教員から直接指導を受けたこと	14
	《場面》先輩から教育・研究の指導を受けたこと	0
	《場面》プロジェクト研究、共同研究を行ったこと	0
	《場面》学生同士の勉強会・研究会に参加したこと	14
	《場面》学会や学外の研究会等に参加したこと	0
	《場面》課外活動(クラブ・サークル等)に参加したこと	36
	《場面》社会活動(ボランティア等)に参加したこと	0
《場面》その他	0	

平成 22～26 年度までの 5 年間における、理科及び農業の教員免許状（第 1 種）の取得状況を《資料 18》に示す。3 種の合計は 88 名であった。高等学校専修（農業）の取得者はなかった。平成 22～26 年度の 5 年間における、「JABEE 修了者」「食品衛生管理者、食品衛生監視員（食品衛生課程修了者）」「測量士補」「実験動物技術者」及び「樹木医補」資格取得者数の合計は 359 名であった《資料 19》。

《資料 18：教員免許取得状況》

年度	中学校一種	高等学校一種	高等学校一種	合計
	(理科)	(理科)	(農業)	
平成22年度	7	15	1	23
平成23年度	1	6	0	7
平成24年度	6	12	0	18
平成25年度	5	11	3	19
平成26年度	4	14	3	21
合計	23	58	7	88

《資料 19：「JABEE 修了者」「食品衛生管理者、食品衛生監視員」「測量士補」「実験動物技術者」及び「樹木医補」資格の取得状況》

年度	JABEE修了者	食品衛生課程 修了者	測量士補 有資格者	実験動物 技術者		樹木医補	計
				1級	2級		
平成22年度	15	40	15				70
平成23年度	14	37	14				65
平成24年度	15	38	15	1級 2級	1 1	3	73
平成25年度	12	33	12	1級 2級	2 0	4	63
平成26年度	12	43	12	1級 2級	3 12	6	88
合計	68	191	68	19		13	359

学会及び論文賞等の受賞については、平成 26 年度に初めて 3 件の受賞が報告された。研究内容は専門教育と関連するものであり、学会等において農学部生らの発表は高く評価され始めたことが伺える。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

学生が在学中に身に付ける学力や資質・能力については、最終学年への進級率及び卒業率が 88%と 95%となり、学業修得期間に定められた能力を獲得している。また、「食品衛生管理者、食品衛生監視員」「測量士補」、新設した「実験動物技術者」と「樹木医補」資格取得者数が増加しているほか、学会での受賞等も見られ始めた。授業時アンケートの結果から、農学部の学生の多くは教員による講義に熱意を感じており、積極的に知識の修得に努めていること、受けた授業から当該分野への興味が強まり、授業は有益だったと答えていることから、学業の成果は期待される水準を上回ると判断する。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

平成 22～26 年度の卒業後の業種別進路を《資料 20》に示す。過去 4 年間の大学院への進学率は 68.2%である。就職先は各学科・コースの教育目的や履修体系によって異なり、大学を含む研究機関や官公庁、民間企業まで幅広く就職している。卒業生の就職先を業種別に分類すると、本学部の特色を生かした食品系及び化学系製造業が 9.0%、公務員(各県に存在する農林水産系の行政及び試験機関を担当する地方公務員、農林水産省と特許庁を主たる就職先とする国家公務員、農林水産系の試験機関である独立行政法人等を合わせたもの)が 5.8%と多い。また、情報通信 (2.4%) 卸売・小売 (2.5%)、サービス業 (3.0%) への就職者もある。

《資料 20:学部卒業後の就職状況 平成 22～26 年度》

業種	食料環境システム学科		資源生命科学科		生命機能科学科		合計	%
	生産環境工学コース	食料環境経済学コース	応用動物学コース	応用植物学コース	応用生命化学コース	環境生物学コース		
農業	0	0	0	3	0	4	7	0.8
建設業	1	0	0	0	0	0	1	0.1
製造業	12	6	7	13	27	11	76	9.0
電気・ガス	2	0	0	0	0	0	2	0.2
情報通信	5	5	0	3	5	2	20	2.4
運輸	1	2	0	0	0	0	3	0.4
卸売・小売	1	7	4	2	4	3	21	2.5
金融・保険	7	2	3	0	2	3	17	2.0
不動産業	1	0	0	1	1	1	4	0.5
医療・教育	0	1	4	0	3	2	10	1.2
サービス	3	10	2	6	1	3	25	3.0
公務員	13	11	2	12	6	5	49	5.8
その他	2	4	5	6	8	8	33	3.9
大学院進学	92	6	117	108	123	128	574	68.2
合計	140	54	144	154	180	170	842	

平成 24 年に、卒業または修了した者を対象として、「卒業生・修了生アンケート調査」を実施した。卒業生 16 人、修了生 50 人（うち神戸大学農学部を卒業した者は少なくとも 27 名）から合計 66 件の回答が寄せられた。学習成果に係る質問は、2)～7) に当たる《資料 21、22》。

《資料 21：卒業生・修了生へのアンケート調査》

Ⅰ. 全体評価

卒業・修了して社会人として活動されている現在、かつてご自身が受けられた農学部・自然科学研究科(農学系)での教育・研究を振り返った際に、その内容について全体的にどのように感じられていますか。

1：高く評価できる 2：どちらかという評価できる 3：普通 4：どちらかという評価できない 5：明らかに評価できない

Ⅱ. 個別評価

1) 在学時、授業や研究に積極的に参加し、活動されましたか。

1：大変積極的に参加・活動した 2：どちらかという積極的に参加・活動した 3：普通 4：どちらかという参加・活動していない 5：ほとんど参加・活動していない

2) 学部・研究科で受けた講義によって培われた基礎的な学力について、社会に出てからどのように感じていますか。

1：高く評価できる 2：どちらかという評価できる 3：普通 4：どちらかという評価できない 5：明らかに評価できない

3) 学部・研究科で受けた講義の先端性について、社会に出てからどのように評価していますか。

1：高く評価できる 2：どちらかという評価できる 3：普通 4：どちらかという評価できない 5：明らかに評価できない

4) 学生実験・実習・演習等を通じて得られた基礎的学力・技術力について、社会に出てからどのように評価していますか。

1：高く評価できる 2：どちらかという評価できる 3：普通 4：どちらかという評価できない 5：明らかに評価できない

5) 卒業研究や大学院での研究等を通じて得られた観察力は、社会に出てから役に立っていると評価できますか。

1：大変役立っている 2：どちらかという役立っている 3：普通 4：どちらかという役立っていない 5：ほとんど役立っていない

6) 卒業研究や大学院での研究等を通じて培われた論理的な思考能力は、社会に出てから役に立っていると評価できますか。

1：大変役立っている 2：どちらかという役立っている 3：普通 4：どちらかという役立っていない 5：ほとんど役立っていない

7) 卒業研究や大学院での研究等を通じて得られたプレゼンテーション能力は、社会に出てから役に立ちましたか。

1：大変役立っている 2：どちらかという役立っている 3：普通 4：どちらかという役立っていない 5：ほとんど役立っていない

8) 在学時に受けた教育・研究を通じて国際的な感覚が培われましたか。

1：大いに培われた 2：ある程度は培われた 3：どちらとも言えない 4：あまり培われていない 5：ほとんど培われていない

9) 学部・大学院におけるカリキュラムは評価できるものでしたか。

1：高く評価できる 2：どちらかという評価できる 3：普通 4：どちらかという評価できない 5：明らかに評価できない

10) 学部・大学院における成績等の評価の公平性は評価できるものでしたか。

1：高く評価できる 2：どちらかという評価できる 3：普通 4：どちらかという評価できない 5：明らかに評価できない

11) 在学時の学部施設等の整備状況は評価できるものでしたか。

1：高く評価できる 2：どちらかという評価できる 3：普通 4：どちらかという評価できない 5：明らかに評価できない

12) 在学時、教育・研究に費やした予算の充実度は評価できるものでしたか。

1：高く評価できる 2：どちらかという評価できる 3：普通 4：どちらかという評価できない 5：明らかに評価できない

13) 学部・研究科の教育・研究にたずさわるスタッフの数は十分でしたか。

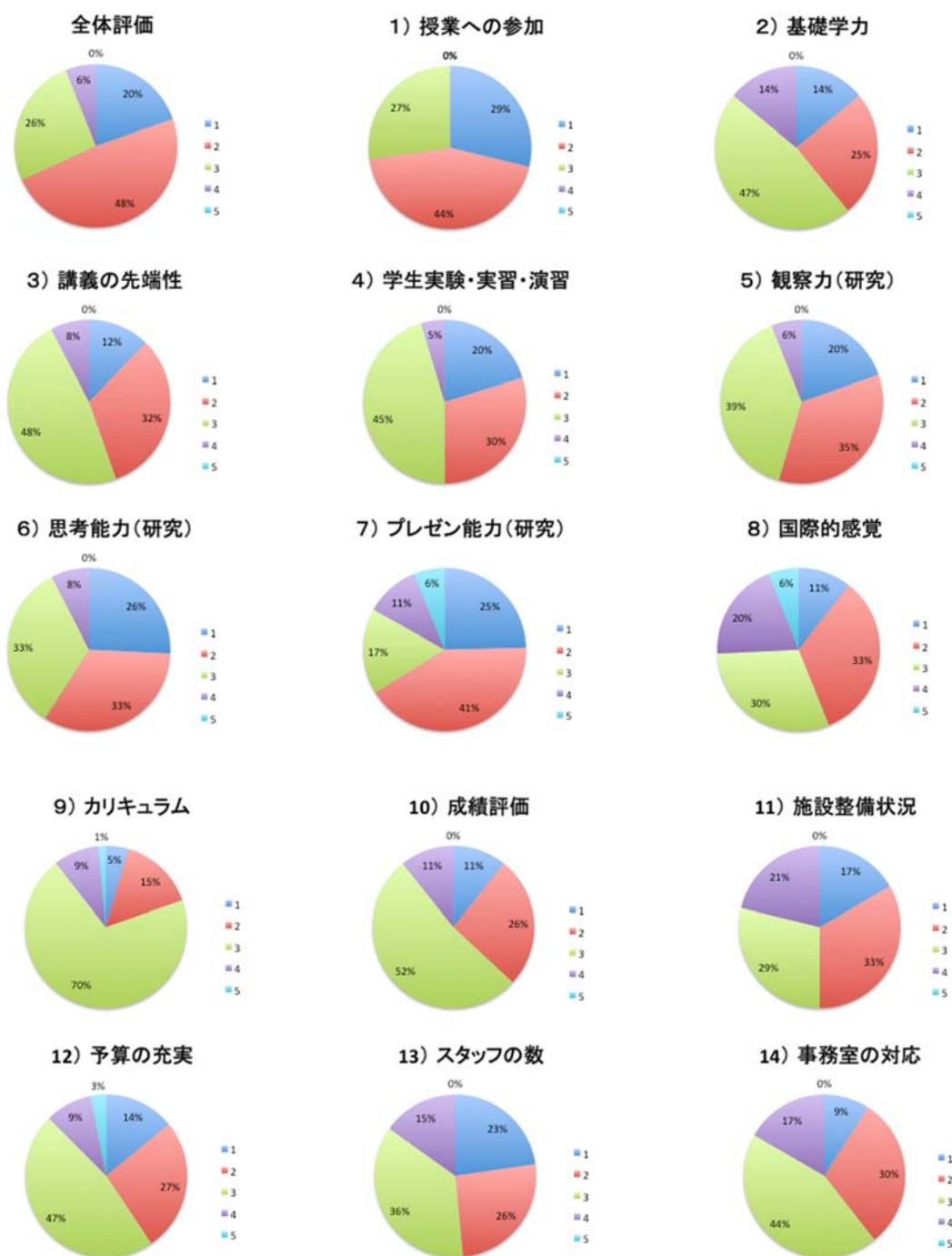
1：十分足りていた 2：比較的足りていた 3：どちらとも言えない 4：比較的不足していた 5：かなり不足していた

14) 事務室の対応はいかがでしたか。

1：かなり対応が良かった 2：どちらかといえば対応が良かった 3：どちらとも言えない 4：どちらかといえば対応が悪かった 5：かなり対応が悪かった

Ⅲ. ご意見 (大学の教育研究活動及び大学生活に対して不足していると感じたことや今後必要と思われることについてご意見をお聞かせください。)

《資料 22：卒業生・修了生へのアンケート調査結果》



学習成果に係る質問のうち、2) 基礎的な学力については39%が「高く評価できる」「どちらかという評価できる」と答えている。また、4) 学生実験・実習・演習等を通じて得られた基礎的な学力・技術力については50%が「高く評価できる」「どちらかという評価できる」と答えている。また、卒業研究を通じて培われた「5) 観察力」(55%)、「6) 論理的な思考能力」(59%)、「7) プレゼンテーション能力」(66%)が、社会に出て役立つとの回答を得た。全体評価としては、68%が農学部での教育・研究内容について「高く評価できる」「どちらかという評価できる」と答えている。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

平成 22～26 年度の卒業生の 68.2%が大学院へ進学しており、大学院進学に必要な能力獲得のための教育は十分なされている。卒業生の業種別就職状況の分析からは、本学部の特色を生かした食品系及び化学系製造業と公務員に就職する学生が多いが、食料生産システム全般に必要な流通・情報系への就職もあり、本学部の教育目的・人材育成の目標に沿った教育の成果が上がっていると考えられる。また、卒業生に対するアンケート調査では、卒業研究等を通じて培われた、観察力、論理的な思考能力、プレゼンテーション能力が社会に出て役立っているとの回答を得た。在学中に修得すべき学力・能力・資質は学部の教育で十分に養われていると言える。

以上のことから、進路・就職の状況は期待される水準を上回ると判断する。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

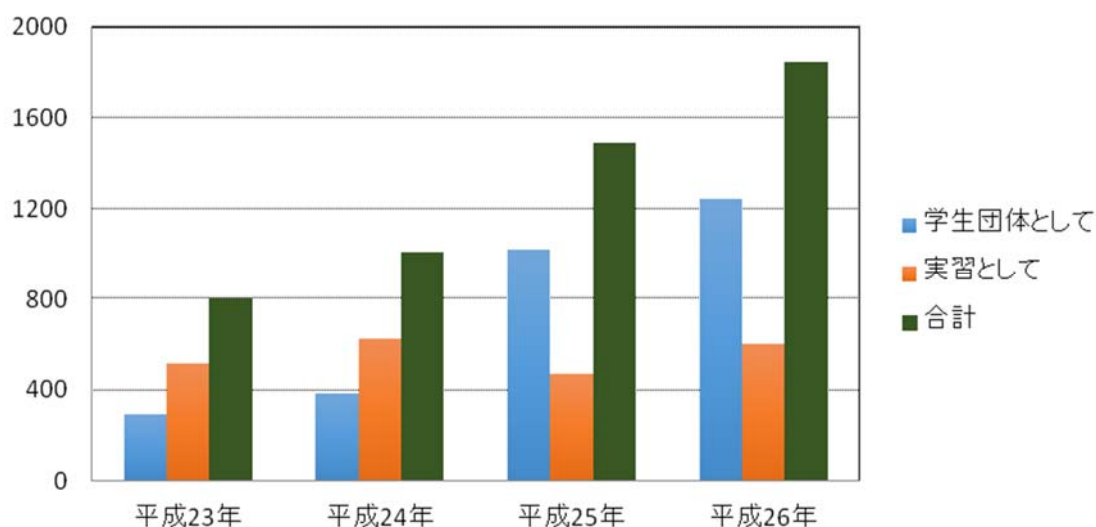
事例① 実践的教育の推進

特徴的な取組の一つとして、食農コープ教育プログラム（平成20年度文部科学省・教育GP採択事業）の充実を挙げることができる《資料23》。篠山市の支援を得て「篠山フィールドステーション」を設置し、篠山市における活動拠点とし、農学部の地域連携センター、食資源教育研究センター、食の安全・安心研究センターと緊密な連携を図ることによって本プログラムの支援体制を構築した。この実施・支援体制のもと、毎年異なる集落の農家に学生を派遣し、実地体験をさせている《資料24》。さらに、本プログラムを修了した学生によるボランティアサークルが平成22年度以降次々と生まれ、受入集落との交流をさらに発展させている《資料25》。中心的な役割を果たす地域連携センターには、篠山市からの支援を受けて特命助教1名が配置されているほか、平成27年度「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に採択されたことによって特命講師1名が配置され、さらに教育の充実が図られている。

《資料 23：食農教育プログラム内容 <http://kobe-face.jp/index.html>》



《資料 24：篠山を訪問した学生数（のべ）》



《資料 25：篠山で活動する学生ボランティアサークル》

活動団体名	ささやまファン倶楽部	ユース六篠	はたもり	にしき恋	サンセット12
設立年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成27年
会員数	平成24年度	10	35	38	-
	平成25年度	9	10	35	-
	平成26年度	7	12	26	-
	平成27年度	10	(全学生が卒業)	(全学生が卒業)	86
活動地域	真南条集落	福住地区	畑地区	西紀南地区	日置地区
主要活動	里山・ピオトーブの整備。地域でのイベントの企画・運営	農作業・里山整備ボランティア。地域でのイベントの企画・運営。	地域行事“はた祭り”を中心としたイベントの企画・運営。農作業ボランティア	農作業ボランティア。借りている田畑での農作物の生産から販売。地域交流。	波々伯部神社と日置神社の祭りの参加による活性化
賞				「農林水産省・食と農林漁業大学生アワード2015」最終審査ノミネート(2015)	

事例② 国際教育の推進

新たに開始したもう一つの特徴的な取組として、UPLB 実用英語演習が挙げられる。このプログラムは、3週間フィリピン大学ロスバニョス校に滞在して英語の集中レッスンを受けるもので、次の3本の柱で構成されている《資料 26》。(i)英会話集中トレーニング：毎日9:00～16:00の6時間の集中英語レッスン(ii)異文化交流 (guided interaction)：毎日の講義終了後、UPLB 学生とさまざまな交流活動を行う(iii)研究所訪問：国際イネ研究所、植物育種学研究所、Organic Farm、バイオテック研究所、自然史博物館、UPLB 植物園等を訪問する。

本演習修了後には学生の意識が明らかに変化し、(a)異文化を尊重する態度が身に付くとともに、日本と日本文化を見つめ直し、その良さを再発見することができるようになった(b)英語でコミュニケーションをすることに抵抗がなくなった(c)積極的に発言し、自分を表現できるようになったことが学生の参加報告レポートから読み取れる。

(<http://www.ans.kobe-u.ac.jp/zaigakusei/uplb2015.html> 、 <http://www.ans.kobe-u.ac.jp/zaigakusei/uplb2014.html>)。

なお、本演習は、平成 26・27 年度、JASSO 海外留学支援制度に応募し採択された。

《資料 26 : UPLB 実用英語演習スケジュール》

Date	Time	Details
August 30,2015 (Sun)		Arrival at NAIA Terminal 2 (1:00 NN) Settle at the CEC Hostel;
Aug 31 (Mon)	9:00 -12:00	Opening Program/Course Orientation
	1:00 - 4:00	Pre Course Diagnostic Test
	4:00 - 6:00	Guided Interaction
Sept 1-3 (Tue to Thu)	9:00 -12:00	Conversational Fluency and Vocabulary Enrichment
	12:00 - 1:00	Break
	1:00 - 4:00	Pronunciation Improvement and Oral Presentation Skills
	4:00 - 6:00	Guided Interaction
Sept 4 (Fri)	9:00 -12:00	Conversational Fluency and Vocabulary Enrichment
	12:00 - 1:00	Break
	1:00 - 2:00	Lecture on <i>MANGA and KOMIKS: A comparative Study of Japanese and Philippine Iconographies</i> by Mr. Rudyard Pesimo, DHUM, CAS faculty.
	2:00 - 4:00	Workshop
	4:00 - 6:00	Guided Interaction
Sept 5-6 (Sat, Sun)		FREE DAY/REST DAY
Sept 7 (Mon)	9:00 - 4:00	UPLB-IRRI Educational Trip
Sept 8-11(Tue to Fri)	9:00 -12:00	Conversational Fluency and Vocabulary Enrichment
	12:00 - 1:00	Break
	1:00 - 4:00	Pronunciation Improvement and Oral Presentation Skills
	4:00 - 6:00	Guided Interaction
Sept 12-13 (Sat ,Sun)		FREE DAY/REST DAY
Sept 14 (Mon)	8:00 - 6:00	Laguna Cultural Trip
Sept 15-16 (Tue, Wed)	9:00 -12:00	Conversational Fluency and Vocabulary Enrichment
	12:00 - 1:00	Break
	1:00 - 4:00	Pronunciation Improvement and Oral Presentation Skills
	4:00 - 6:00	Guided Interaction
Sept 17(Thu)	9:00 - 2:00	Guided Practice for Graduation Presentation
	1:00 - 4:00	Post-Course Evaluation
Sept 18(Fri)	9:00 - 1:00	Closing Program
	11:00 - 1:00	Farewell Lunch
	1:00 - 6:00	Free Time/Prepare for Departure
Sept 19 (Sat)		Departure for Japan Leave CEC Hostel at (10:00 AM) for NAIA Terminal 2

事例③ 附属食資源教育研究センターの共同利用拠点化と他大学への授業の提供

附属食資源教育研究センターは、本学農学部生に対する実習教育に加え、平成 22 年度からは大阪府立大学の「食料生産実習」を、平成 25 年度からは近隣の公立・私立大学を対象に広く実習教育の提供を開始した。平成 26 年度には「農場と食卓をつなぐフィールド教育拠点」として教育関係共同利用拠点の認定を受け、他大学の学生に対しても農業と農学の重要性和食に関する知識を学ぶプログラムを提供している。

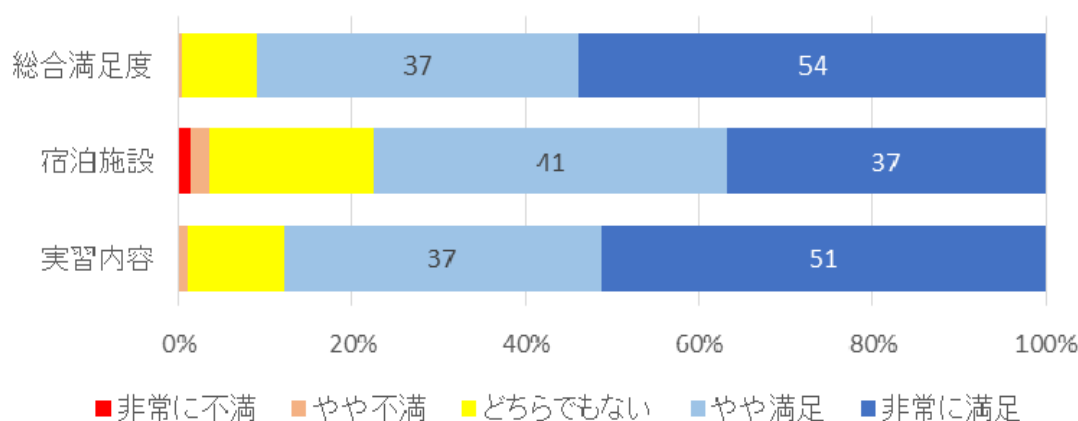
平成 27 年度は 11 大学がセンターで実習を行い《資料 27》、参加人数は 381 人・日であつ

た。参加学生の評価は高く（有効回答数 226 名）、総合的な満足度では 91%が「非常に満足」「やや満足」と回答している《資料 28》。これらの取組は、本学部のみならず大学教育全体の教育の質を向上させるものである。

《資料 27：平成 27 年度における共同利用一覧》

日 程	利用大学名	利用人数(人)	日 程	利用大学名	利用人数(人)
5/23, 9/3-4	大阪市立大学	27	9/17-19	神戸女学院大学	36
5/10, 10/18	兵庫大学	122	9/10-12	大阪府立大学	51
5/24, 9/1-2	神戸女子大	18	10/3	吉備国際大学	43
8/31-9/2	コンソーシアム参加大学	80	8/17-20	九州大学	4
				合 計	381

《資料 28：他大学学生に対するアンケート集計結果》



(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

事例① 高い進級率・卒業率の維持、就職率の維持

教育カリキュラムの適切な運用や、教員に対する FD 研修及びピアレビューによる意識向上等により、過去 5 年間の学部生の進級率は 88%、卒業率は 95%と、高い値を維持している。また、就職活動をする学生のために平成 26 年度に学部独自のキャリア支援室を設置し、就職関係の資料等も常時閲覧できる体制を整えた《参考 URL：就職情報、企業、公務員等求人一覧表 <http://www.ans.kobe-u.ac.jp/zaigakusei/syusyoku/index.html>》。

事例② 「実験動物技術者」及び「樹木医補」資格取得者の増加

平成 23 年度に「実験動物技術者」、平成 24 年度に「樹木医補」の資格取得が可能となるようカリキュラムを整備した。平成 24 年度では両資格取得者総計が 5 名であったが、平成 26 年度では 21 名と急増した。《資料 19》。

事例③ 充実した農場実習の実施

附属食資源教育研究センターは、本学学部生に対して年間約 50 日の「農場実習」を実施している。学生の満足度は非常に高く、平成 24 年度・27 年度ともに、農場実習を受講した学生の 94%以上が実習を必要と感じ、実習を受けてよかった（5 段階評価で 4 以上）と回答している《資料 29》。

《資料 29：本学学生に対する農場実習アンケート集計結果》

(単位：人)						
年度	コース	5 (はい)	4	3	2	1 (いいえ)
農牧場実習を受講してよかったですと思いますか？						
平成24年 (n=61)	応用動物学	20	1	0	0	0
	応用植物学	21	2	0	0	1
	その他	8	7	1	0	0
	計	49	10	1	0	1
平成27年 (n=34)	応用動物学	13	6	0	0	0
	応用植物学	8	4	1	0	0
	その他	0	2	0	0	0
	計	21	12	1	0	0
農学を学ぶ上で農牧場実習は必要だと思いますか？						
平成24年 (n=61)	応用動物学	17	4	0	0	0
	応用植物学	19	4	0	0	1
	その他	7	8	0	0	1
	計	43	16	0	0	2
平成27年 (n=34)	応用動物学	10	7	2	0	0
	応用植物学	9	4	0	0	0
	その他	0	2	0	0	0
	計	19	13	2	0	0